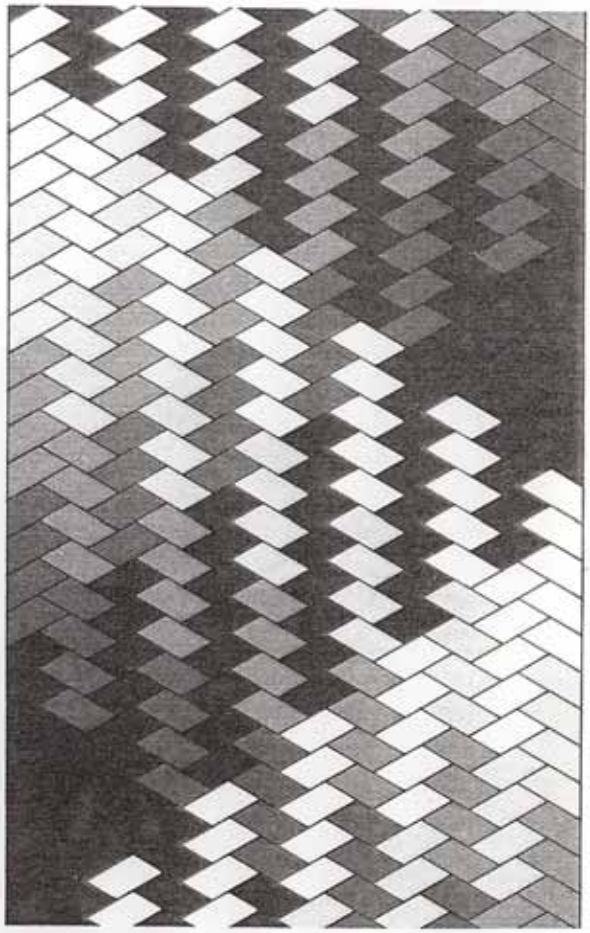
【技術分類】３－１－２　組物／組紐／平組
【技術名称】３－１－２－１　高麗組

【技術内容】
　組紐はその形状から、丸組、平組、角組に分けられる。平組には高麗組、笹浪組、唐組、綾竹組などがある。
　高麗組は高台で作った二間飛び組織である。高麗組の平面図を**図 1** に示す。
　作業者は組台の中央後に座り、左右から集めた多くの組紐を中央の巻き取り軸から出した巻き取り紐の先に結びつけ、綾書きのとおりに、左右とも二段になっている組糸の間に指をいれて、糸筋を上げ、残った糸を押さえて、その上下の空間に片側の糸をくぐらし、樫の木で作った約３尺ほどのへらで打って組む。

【図】
　図 1　高麗組の平面図（1 群 2 間組、25 篠）



高麗組（1群2間組），25條，平面図
ぼかし山道柄(10，16ページ参照)

　出典：「新技法シリーズ　組紐を設計する」、1981 年 2 月 28 日、藤田昌三郎著、株式会社美術出版社発行、53 頁　高麗組（1 群 2 間組）,25 篠,平面図　ぼかし山道柄

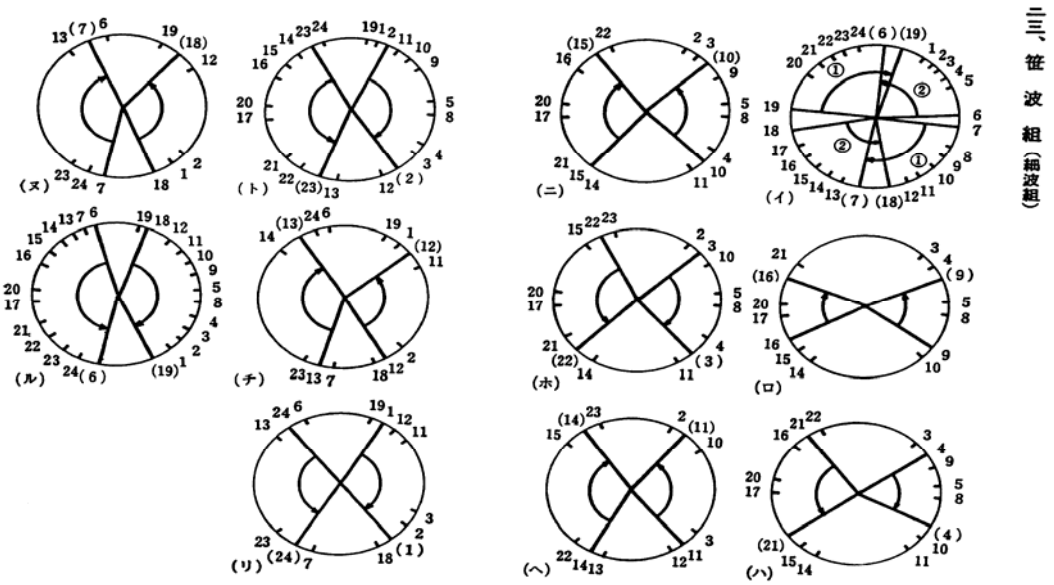
【出典／参考資料】

　「新技法シリーズ　組紐を設計する」、1981 年 2 月 28 日、藤田昌三郎著、株式会社美術出版社発行
　「京くみひも」、1979 年 3 月、菅沼晃次郎著、民俗文化研究会発行

【技術分類】３－１－２　組物／組紐／平組
【技術名称】３－１－２－２　笹浪組

【技術内容】
笹浪組の組紐の特徴はＶ字形の模様が出せることである。
笹浪組の組み方を**図 1** で説明する。図中（イ）のように右側の 7 番と 6 番をそれぞれ左側の（6）と（7）に置き、左側の 18 番と 19 番を右側の（18）（19）に置く。これで、左右の糸が入れ替わり、軸糸がわたることになる。（ロ）～（ル）のように、外側から内側に向かって順に、右手前から右向こうへ、左手前から左向こうへ、右向こうから右手前へ、左向こうから左手前へ、糸を動かす。笹浪組を組むときのポイントは、途中で糸に撚りがかからないようにすることである。撚りがかかるとその部分が細くなり、目が不揃いになる。

【図】
図 1　笹浪組の組み方



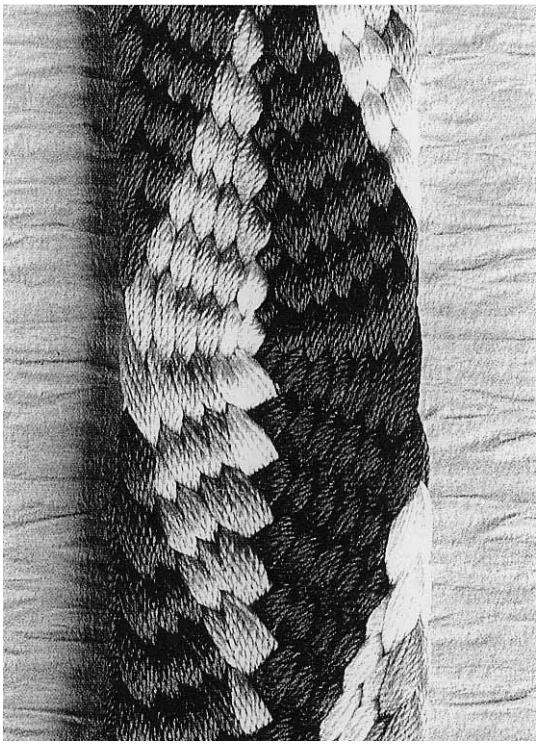
出典：「くみひもの研究」、1978 年 5 月 25 日、山木薫著、株式会社総合科学出版発行、180－181 頁　（イ）（ロ）（ハ）（ニ）（ホ）（ヘ）（ト）（チ）（リ）（ヌ）（ル）

【出典／参考資料】
「くみひもの研究」、1978 年 5 月 25 日、山木薫著、株式会社総合科学出版発行
「京くみひも」、1979 年 3 月、菅沼晃次郎著、民俗文化研究会発行

【技術分類】３－１－２　組物／組紐／平組
【技術名称】３－１－２－３　唐組

【技術内容】
唐組は、菱形の模様を出すことのできる平織である。笹浪組の応用で組むことができる。唐組の作品例を**図 1** に示す。唐組の組み方は、菱形模様の半分までは笹浪組と同じである。笹浪組の手順を 7 回繰り返して、V 字の模様を組む。そこから反転手順になり、内側から外側に向かって順に、手前側と向こう側の入れ替えをする。
唐組は、糸の張力の違いから紐に凹凸ができ、それが味わいにもなっている。

【図】
図 1　唐組



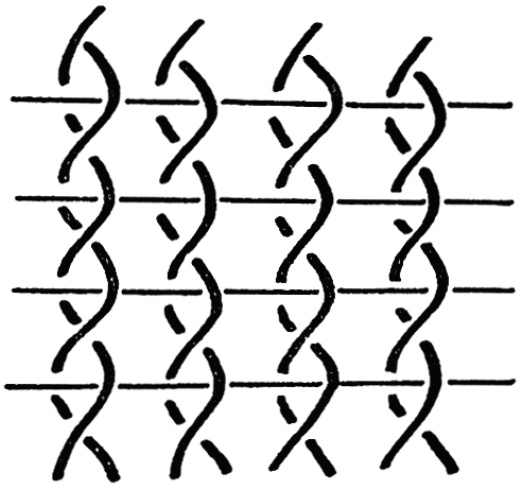
出典：「新技法シリーズ　組紐を設計する」、1981 年 2 月 28 日、藤田昌三郎著、株式会社美術出版社発行、11 頁　唐組

【出典／参考資料】
「新技法シリーズ　組紐を設計する」、1981 年 2 月 28 日、藤田昌三郎著、株式会社美術出版社発行
「くみひもの研究」、1978 年 5 月 25 日、山木薫著、株式会社総合科学出版発行

【技術分類】３－１－２　組物／組紐／平組
【技術名称】３－１－２－４　綾竹組

【技術内容】
綾竹組はもじり織りの一種である。**図 1** に示すように、経糸二本ずつが組みになっていて撚り合わせ、その中に緯糸を一本、または左右から一本ずつ入れてできたものである。経糸には太い糸をできるだけ近づけて隙間の無いようにする。緯糸はできるだけ細かくして耳の経糸と同色とする。そして、耳の所でも緯糸があるかないか判らないようにする。緯糸は表裏面とも外からは見えない。

【図】
図 1　綾竹組の組み方



第　1　図

出典：「くみひも」、1969 年、菅沼晃次郎著、民俗文化研究会発行、81 頁　第 1 図

【出典／参考資料】
「くみひも」、1969 年、菅沼晃次郎、他著、民俗文化研究会発行
「京くみひも」、1979 年 3 月、菅沼晃次郎著、民俗文化研究会発行